

東京YMCA

12
2018年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

世界YMCA／YWCA合同祈禱週 2018年テーマ「ユースエンパワーメントが世界を変える」

次世代の育成へ 一限りない可能性を信じて

江東YMCA幼稚園 アドヴェントの装飾



—聖書 ヨハネによる福音書15章1～7節—

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。（中略）

わたしにつながっていきなさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていかねば、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、私につながっていかねば、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。わたしにつながっていない人がいれば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる。」

私は「日本キリスト教団」に所属する1700の教会の中で唯一の「青年センター」の担当牧師をしていることから、よく教会で次世代の育成について話す機会があります。そこで私はよく、三つの大切なことについてお話しさせていただいています。

一つは「愛」です。次世代の青少年を育成したいと願う時、何よりもまず次世代への愛がなければなりません。社会のために次世代が必要なのはなく、また教会やYMCAのために青少年が必要なのではありません。そのような自己中心的な愛ではなく、純粹に子どもたちのために思う愛です。それを突き詰めていくことによって、教会あるいはYMCAは本当に世に必要とされる働きができるのであり、結果として良い実を結ぶようになると思います。



二つ目は「希望」です。あきらめない、ということです。青年を育てようとしてもうまくいかないことがよくあります。教会ではよく「青少年が来ない」「自分も年を取り過ぎた」といった声を聞きます。けれども年齢を重ねた壮年層の後ろ姿は大切です。青年たちだって、信仰の大先輩のお手本がなかったら困るのです。青年期にはいろんな疑問をもつことがある。その時に教会や社会での高齢キリスト者の後ろ姿に、こんな一生も送れるんだと確信を得たり、勇気づけられる青年たちがいます。YMCAもそうです。私たちはぜひ希望をもって青少年と自分自身とYMCAとの今と未来に希望をもって歩みたいと思います。

三つ目は信仰です。先ほど読んだ聖書（上梓）には、良い実をつけないぶどうの枝は農夫が切つて焼いてしまふと書かれています。私は子どもの頃、この聖句が怖くて嫌いでした。けれども学びを進める中で、この句



野田 沢 牧師

日本キリスト教団学生・青年センター「学生キリスト教友愛会(SCF)」牧師。
学校法人東京YMCA評議員。
青山学院女子短期大学講師。
東北学院大学講師。
若者のために働きたいと願う、現在まで教会や学校そして青年センターのチャプレンを務めている。

全世界のYMCAとYWCAが毎年11月第2週に一つのテーマについて共に考え祈る「合同祈禱週」。1904年から続くこの週間が今年11月11日～17日、「ユースエンパワーメントが世界を変える」若者の限りない可能性を信じて」をテーマに開催されて共に考え祈りました。

はそういうことを言っているのではない、イエス・キリストは私たちに努力を求めているのではなく「私はあなたとつながっている」と約束している。そういう言葉だと分かっています。イエスは人間が不完全で豊かな実を結ばないかもしれないことは重々承知です。それでも私たちを切り捨てずに救い、愛と希望へ導くと言っているのです。

私たちには理解し得ない言葉ですが、実際にイエスはこの話をした次の日に十字架につけられました。良い実をつけない枝を切ろうとする「農夫」、つまり父である神に対して、信仰の大先輩のお手本がなかったら困るのです。青年期にはいろんな疑問をもつことがある。その時に教会や社会での高齢キリスト者の後ろ姿に、こんな一生も送れるんだと確信を得たり、勇気づけられる青年たちがいます。YMCAもそうです。私たちはぜひ希望をもって青少年と自分自身とYMCAとの今と未来に希望をもって歩みたいと思います。

三つ目は信仰です。先ほど読んだ聖書（上梓）には、良い実をつけないぶどうの枝は農夫が切つて焼いてしまふと書かれています。私は子どもの頃、この聖句が怖くて嫌いでした。けれども学びを進める中で、この句

11月にフィランドを訪れる機会があり、ラッポランドのサンタクロース村で本物のサンタさんに会うことができました。温かく大きな手で握手をしてみようと、自分でも不思議なほどにワクワクと嬉しくなっていました。「サンタクロースって何？」改めて思った。松岡享子さんは著書『サンタクロースの部屋』で、「幼い日心からサンタクロースの存在を信じることは、その人の中に信じているという能力を養う」と書いています。保育園や幼稚園にサンタが登場することにも意味があるのだと考えさせられる▼サンタは、聖ニコラウスという実在した司祭がモデルとされている。彼は貧しい家の娘が売られると知り、真夜中に煙突から金貨を投げ入れた。それが暖炉に干してあった靴下に入り、娘は助けてくれたら、自分の回りで苦しんでいる人、助けを必要としている人に何かをする心、大切なものを分け与える心と答えたい。サンタさんから大きなプレゼントをいただいた。（社会体育・保育専門学校教務部長／保育科学科長・齊藤希世）

赤△三角

YMCA子ども水泳クラス

泳力テストに安全スキル追加



YMCAの子ども水泳クラスでは、水難事故から子どもたちを守るため、日ごろから泳法と共に水上安全に関する知識と技術を身につけられるよう取り組んでいます。この度、この安全スキルをより定着させていくことを目指して、泳力基準「ワッペン」の項目に

「水上安全スキル」が追加されました。この「ワッペン」は、「かに」「さめ」「いるか」など全10段階（写真）あり、学期末にはこれに基づいてテストを行って泳力に応じたワッペンが贈られるという、いわばYMCA水泳のカリキュラムです。今後はこのワッペンテストの項目中に「壁にしがみついている」「顔をあげたままで泳げる」といった安全に役立つスキルが追加されることになります。

YMCAは1960年代に子どもの水泳教室を開始した当初から水上安全法の開発に力を入れており、1981年からは毎年6月に全国で「ウォーターセーフティーキャンペーン」を開催。各地の小学校や幼稚園に出張して着衣泳の指導をしたり、ハンドブックを作成して配布するなど、水上安全スキルの普及に努めています。今後は、ワッペンテストの項目に明記することによって、さらに子どもたちの理解を深め、目標意識をもって習得していくことが期待されています。

2020年 キャンプ100年に向けて
ボーイスカウト等5団体でシンポジウム

基調講演をした錦織 一郎さん



ボーイスカウトによるロープを使った遊び



キャンプに携わる5つの青少年団体（ボーイスカウト、ガールスカウト、YMCA、YWCA、日本キャンプ協会）が11月17、18日、東京YMCA山中湖センターに集まり、「YMCAキャンプ100年記念シンポジウム」を行った。

この5団体は、キャンプの教育的意義や指導者のトレーニング方法、活動の紹介などを社会に発信していくため、2011年に実行委員会「出会いと体験の森へ」を組織してフォーラムなどを開催しており、今年で7回目を迎える。今回の主管はYMCA。各団体か

らはスタッフやユースボランティアリーダーなど日ごろキャンプに関わる66人が参加した。

基調講演は、大阪女子学院理事長の錦織 一郎さん（元大阪YMCA総主事）から『教育キャンプを継承するみなさんへ』と題し、YMCAが教育キャンプを始めてから約100年の歴史と意義を、さま

ざまな角度から学生たちにもわかりやすくお話しいただいた。錦織さんは、キャンプは今も昔も人材育成に大きく役立っていること、特にグループワークや小集団活動の意義について確認した後、今後の100年に向けて私たちが進むべき方向として次の5項目について話された。

1. 地球環境、自然環境をいかに守り、保護し、育むかという視点
2. 平和、安全、環境、人権を守っていくため（キャラクタービルディング）
3. 誰でも参加できる状況を生み出す（フーマイゼーション）
4. 指導者（特にキャンプディレクター。キャンプを通して「幸せ」を具現化する人）を育てていく。
5. 子どもたちに自然や人間との交わりを通して、神秘的な体験や霊的な体験をプロデュースするという視点。

この5つの視点を持ち、キャンプを教育の場として、また健康な子どもたちを育む運動として永続的に展開し、拡張していくことに意味があると語られた。

基調講演後は、5団体の代表者によるパネルディスカッションや

グループディスカッション、また参加者全員でのキャンプファイヤーや各団体によるゲーム大会、さまざまなアクティビティ紹介など、盛りだくさんのプログラムを楽しんだ。

世代を超え、所属団体を超えて、キャンプを運営する関係者が集い、良き交わりの時間を過ごし、実り多き機会となった。2020年のキャンプ100年に向け、また次の100年に向かってさらなるプログラムの発展を願い、散会となった。

（東京YMCA社会体育・保育専門学校校長 堀雄二）

子育てコラム



「ごめん」「いいよ」
を急がず見守る

小学2年生くらいの頃、どこかの旅行土産で母から小さなブローチをもらいました。着物の姿の丸い人形が揺れるようにピンに付いていて、何となく気に入りました。先生が一生懸命命をかけてくれたことも解っている。大切な物なら学校に持つて行かなければよかったのに

張り、人形が取れてしまいました。その時は相手の子に文句の一つでも言ったのか、その子は謝ってくれたのか、よく覚えていませんが、先生がすぐにポンドを付けて直してくれたことにはよく覚えています。でも、不恰好に歪んだ人形がポンドで辛うじてぶら下がったブローチを手に、悲しい気持ちを抱えて家に帰りました。

という反省もある。それでも私は、すぐに気持ちを静めることはできませんでした。

子ども同士のケンカの場面でも「ごめんね」「いいよ」というやり取りを目にすることがあります。「ごめんね」と言われて、言葉の様に「いいよ」と応え、一見微笑ましい光景ですが、疑問に思うこともあります。本当に今、謝り、許せるのかな？と。

魔法のように無かったことにはならない」という気持ちと「無かったことにならないからこそ、諦めることも必要だ」という思いが交錯します。悲しい気持ちの折り合いをつけるのは簡単ではありません。相手を許すことに時間を要することもあるでしょう。

私はいつの間にか許すことができていました。謝ること・許すことを急かさず、心の葛藤を見守ることも時には必要なのではないかと、今もそのブローチを見るたびに思います。

港区芝浦学童クラブ
主任 上原 永可



総主事カフェ

東京YMCA総主事

菅谷 淳

「ある夜、私は夢を見ました。砂浜を歩いている夢です。後ろを振り返ると、これまでの私の歩いてきた人生が足跡として残っていました。足跡は二人分ありました。一つは私の足跡、もう一つは神様の足跡でした。ただその足跡を見ると、ところどころ一人分の足跡しかない時期がありました。それはわたしが人生で辛く、苦しい時でした。

私は神様に尋ねました。『神様、あなたは、いつでも私とともに歩んで下さると約束されました。』

た。それなのに、私の人生の一番辛い時、苦しい時にそばにいて下さらなかつたのはなぜですか。一番あなたを必要としていた時に、なぜ神様は私を見捨てられたのですか？神様は言われました。『わたしの大切な子よ。わたしはあなたを愛しています。わたしはあなたを決して見捨てたりはしません。ましてあなたが苦しみや試練にある時にこそ、そばにいます。足跡が一つだったのは、わたしがあなたを背負っていたからです』

これは1964年、カナダ人のマーガレット・パウワズさんという方が書いた詩です。ご主人のポールさんも大層気に入っていました。ところが引越しの時にこの詩の入った荷物が間違った住所に

配達され、行方不明になってしまいました。それがいつしか誰かによって「作者不詳」ということで発表され、知られるようになっていききました。

それから何十年かのち、ポールさんは水難事故に巻き込まれ、重傷を負って緊急入院しました。その病院の看護師さんが集中治療室のポールさんを励まそうと偶然この詩を読んで聞かせてくれたそうです。看護師さんは、「この詩ととてもいいでしょう。私もこの詩を読むたびに励まされるんです。ただ作者が分からないらしいの」といいました。ポールさんはたいそう驚き、身動きできない中、「その詩の作者を知っています。それは私の妻が若い頃に書いた詩です」と涙ながらに声を

もうすぐクリスマスですね。暗い世の中に一筋の光をもたらしたクリスマスという奇跡の時を迎えるにあたり、辛く苦しい時こそ神様がそばにいて下さることを覚え、感謝をしたいと思います。

第20回
テーマ

日本Y M C A大会 全国から250人が参加

すべての“Y”がつながる日

2年に一度、全国のY M C A関係者が集まる「日本Y M C A大会」が11月23～25日、御殿場のY M C A東山荘で開催され、各地の会員や学生ボランティア、役員、スタッフ約250人が参加しました。

今年テーマは「つどえ東山荘に！すべての“Y”がつながる日」。参加者たちは、さまざまな分野で活躍する仲間たちとの交流を楽しみ、Y M C Aについての理解を深めました。大会の企画運営は35歳以下のユースたちによる実行委員会が担い、多様な参加者同士が交流しやすいように、グループでのアクティビティやグループ編成にも工夫がされました。

「すべての“Y”がつながる日」というテーマで、若手スタッフやボランティアなど30人が参加。初めて参加した2人のスタッフに感想を聞きました。

熱いユースと
温かいシニア

江東センター
國井 貴仁

行われた日本Y M C A大会。私自身が1番強く感じたことは2つの温度です。1つはユース世代の強い「熱さ」です。もう1つはシニア世代の『温かさ』でした。悩みながらも積極的に、Y M C A

の1員としてがんばるユース世代の熱い思い。実際に自分自身が現場に出るわけではなく「ユース世代を支えたい」と語ってくれるシニア世代の大きな温かさ。チャブレンを務めた村瀬義史さんがクロージングセレモニーの時にこんなことを話していました。『Y M C AのYはヤング。ヤングとは“若い”だと思ってい

Y M C Aの
幅広さ実感
チャイルドケアセンター
青木みさと

は有意義でした。物資による支援活動だけでなく、保育士だからこそできる支援があることは、ぜひ覚えて活かしていきたいと思います。

「若々しい」であると感じました。それぞれの思いや考えは違うけれど、同じ方向を見ていて、同じ温度があり、すべての“Y”がつながっていると思えた3日間でした。

Y M C Aの保育園で働いて12年目になります。これまで日本Y M C A大会のことも知らず、東山荘にも初めて行きま

は不安でしたが、参加してみるとグループの人たちと打ち解けやすいという企画が用意されていたり、話しやすい環境作りがされていて不安な気持ちはずっと解消されました。特にグループディスカッションの中で、仙台と盛岡Y M C Aの方から聞いた3日間でした。今回の経験を日々の保育に活かしていきたいと思いま

東京-N Y フロストバレー便り

今年のサマーキャンプでは7年ぶりに、日本語を第二言語とする子どもたちのプログラムJ S L (Japanese as a second language)を取り入れた。これは通常のキャンプ中に毎日2時間、日本語の勉強をするもので、日本にゆかりのある5人の子どもたちが参加した。

J S Lのクラスの中で家族に手紙を書く授業があった。その様子を見ながら私は自分自身の体験を思い出した。私は6歳から6年間イギリスで過ごし、中学1年生で日本に帰ってきた。帰国後初めて手紙を書いた時、宛名の「To～」をどう日本語で書けば良いか分からず途方に暮れたのをよく覚えている。母に尋ねると「～様」を使うことを教えられ、「そんなことも知らなかったのか！」と驚かれた。

「そんなことも知らないのか」ということは海外で暮らす日本人にはたくさんある。私の場合、ぞうきんの絞り方、「立ち読み禁止」の意味、「月極」の読み方などを知らず恥ずかしい思いをした。

無意識の中にある「日本人なら知っているこ

と、身についているであろうこと」という当たり前が、実は環境が違くと身につかないことに気付かされる。だから日本人同士でも、海外で出会うと「あれ？なんか違う？」という日本人であって日本人でないような感覚を味わうことがある。しみじみ「日本人らしさ」とは何なのかを考えさせられる。

文化、習慣、常識というのは空気のようなもので、目に見えず、普段はそのことを意識しない。だからこそ環境を変えて生活してみると多くの発見がある。そして改めて多様性は身近に存在することを実感する。

私たちのキャンプは「パートナーシップ」のため日米両方の文化が混ざり合った第三の文化である。「トライステイト地域で生活する日本語を話す青少年とその家族を援助すること、アメリカに住む人と日本に住む人の相互理解を深めること、さらには、世界平和を促進すること」という使命にあるとおり、両国の架け橋となり真の国際人が育つことを願っている。(東京-N Yフロストバレーパートナーシップ現地ディレクター 池田麻梨子)

東京Y M C Aの41人が表彰

日本Y M C A大会の席上では毎回、Y M C A運動にご奉仕くださった方々への感謝と表彰が行なわれますが、今年は全国で309人が表彰され、このうち東京Y M C Aから贈られました。

2018年度表彰者

【青少年奉仕賞】	岩瀬康彦 遠矢良男	並木信一 吉崎 勇	六本木信久
【50年継続会員賞】	安藤正武 石川喜代子	久保川 守 小林明彦	関喜一郎 手島毅郎
吉崎 勇			
【25年継続会員賞】	安藤正武 石川喜代子	久保川 守 小林明彦	関喜一郎 手島毅郎
【25年勤続者賞】	愛洲久美子 石丸裕子	上田弘実 沖 利柯	小野 実 菅野牧夫
小沼 円 高田京子			
勝田正佳 金子雅彦			

日本YMCA同盟「感謝」

YMCA史を研究する
YMCA史学会



1996年の設立から20年余。東京Y M C A資料室を活動拠点とし、年4回例会を開催して研究発表を行い、それを会報にまとめて発行している。2003年には『新編日本Y M C A史』を編纂した。現在は、退職主事やY M C A会員など80人と10カ所のY M C Aが登録。さまざまな視点からY M C Aの動きを検証し、語り継いでいる。写真は史学会理事長の齊藤實氏。

2018年度 特別功労賞

学校法人東京Y M C A学院理事長
徳久俊彦さん



1929年生。東大Y M C A学生寄宿舎への入舎をきっかけにY M C A歴は70年になる。28歳で東京Y M C A山手学舎運営委員となって以来、常議員、監事、理事とあらゆる役職を歴任。勤務先でも多忙を極める中、日本Y M C A同盟でも役職を重ね、戦後のY M C Aをけん引してきた。とにかく人のつながりを大切にする姿は、まさにY M C Aのブランドスローガンそのものである。

港区芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ
「あいぶらまつり」

今年も来場者2000人超



東京Y M C Aが運営する「港区立芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ（愛称・あいぶら）」は11月4日、第12回となる「あいぶらまつり」を実施しました。途中から小雨が降るあいにくの天気でしたが、2000人を超える方々が来場され、あいぶら館内も、また隣接するプラタナス公園もにぎわいました。

「あいぶらまつり」は特設ステージで行なわれたフラダンスと職員有志のウクレレ

2007年の開設以来毎年行っているイベントで、例年多くの地域の方々が楽しみに来館くださっており、今年も前売りチケット1000枚、当日チケット400枚がすぐに完売となる盛況ぶりでした。

またこのまつりは、毎年200人以上の方がボランティアとして運営に協力してくださっていることも特長です。今年も、近隣の5つの町会や自治会、民生・児童委員、芝浦小学校PTAのほ

か、東京Y M C Aが運営する芝浦こども園と芝浦学童クラブの生徒、東京Y M C A社会体育・保育専門学校生、そして日ごろ「あいぶら」を利用している高齢者や小中高生など総勢270人のボランティアの力によって運営され、模擬店や遊びコーナーなど約40のブースを出展することができました。

飲食コーナーでは毎年ご活躍くださっている町会・自治会の方々が慣れた手さばきで、焼きそばや鳥の唐揚げ、サイコロステーキ、フランクフル

ト等を次々と売りさばいていました。また、かき氷やチョコレートブラウニー等のコーナーでは児童たちが、民生児童委員や高齢者、学生、保護者などとペアを組んで店員となりました。ゲームコーナーでは、小学校PTAやこども園・学童クラブのスタッフが中心となり、さまざまな工夫を凝らした遊びが15店舗も並び、子どもたちに大人気でした。

特設ステージでは、日ごろあいぶらを利用している子どもたちのヒップホップのダンスや、高齢者と児童のフラダンスチームの競演等が行われ、それに職員有志のウクレレ隊が加わり、最後は子どもたちによるソーラン節で大盛り上がりでした。

あいぶら開設から12年、地域コミュニティの一翼を担う施設としての歩みが着実に根付いてきていることを感じると同時に、多くの方々に支えられている施設であることを実感するイベントでした。

(館長 波多啓造)